育成　あさくち

令和５年１月２４日　No.52
浅口市青少年育成センター
号外

🏆岡山学芸館高校サッカー部　日本一おめでとう🏆

このニュースは、我々岡山県人に自信と勇気と活力を漲らせ、近年に類のないような喜びを与えてくれました。新聞や SNS で各方面からの情報を見てみると、監督を含めたスタッフや、選手たちの努力などの美談が満載です。

ドキドキしながら観た決勝戦、相手校はＪリーグ内定選手がいるなど、個々の力が強く、１対１でボールを支配され、セカンドボールの回収率でも、後手に回っている場面がかなりあったように思います。それでも得点は３対１の快勝でした。

本当に凄かった！　嬉しかった！

～試合後の高原監督の言葉～

最後まで危ない時間帯もありましたけど、体を張って粘り強く守備をしてくれたことが、勝てた要因。うちにはスターはいないけど、全員がハードワークしてくれた。初戦から勝ち上がっていくなかで１戦１戦本当に成長して、集中を切らさず持っている力を発揮してくれたのがこの優勝につながった。

と選手を称えていましたが、私には試合中に時々映る監督の表情がとても印象的でした。

感情を表に出さず、選手たちを信じ、焦らず慌てず、平常心で選手たちに寄り添っているように見えました。この感じは、表面に出て来る“熱さ”は少し違いますが、ワールドカップの森保一監督と、どこか似たものがあったと感じました。

指導者の立ち位置が上でなく、横とか、下とか、斜めとか、選手の周囲にあり、昭和の時代の厳しい監督像とは、一線を画していたと感じました。

（私の一方的な思い過ごしかも知れませんが・・・）

～２０１５年、夏の甲子園、門馬監督の優勝インタビュー～

アナウンサー『小笠原選手がホームランを打った時、抱き合っていましたが、今の感想はどうですか？』と聞かれ、監督**『ずっと抱きしめていたかったです』**。

一瞬“えっ”と思い、ビデオで確認すると、確かに駆け寄って来る小笠原選手を、鷲が翼を広げるように、大きく両手を広げ抱きしめていました。私の記憶の中で、これは甲子園で見た初めての光景でした。「ベンチで腕を組み、厳しい眼差しで選手を見つめるのが監督！」という高校野球のイメージが変わった瞬間でした。

時代は流れ、コーチングのスタイルも、変わるのが必然なのでしょうか。

同じく 2015 年の講演会、当時のオリンピック委員会理事の山口香さん（柔道）がこんなことを言いました。

○時代が変わり、社会で必要とされる人間・能力も変わって来た。変わらなければならないのは、私たち（指導者）
○当時（1964年東京五輪）は、頑張れば世界で 1 位になれる。厳しいのは当たり前、「我慢」「根性」があればどうにでもなる。「巨人の星」「アタック N01」➡昔の感覚が今に適応するか。
○変化は不安をもたらす。体罰を繰り返してきた人間にとっては、生きて来た時代を否定しろと同じ。挑戦せずに、現状維持には安心感がある。変わらなければならないのは誰か？子どもではない。
○今の子どもを指導するのに、私たちの尺度に合わせたら、育てられない。
○私たちに求められているのは「柔軟性」と「open mind」。
○選手（生徒）には「努力しろ」「できないことはない」と言うが、コーチ（教師）自身が、自分に厳しく進化や成長を求めているだろうか。
“You touch the future”（我々は選手の将来に触れている） ～アンディー・ロクスブル～

“スーパー中学生”ドルーリー朱瑛里が全国女子駅伝で 17 人抜き！新星ヒロインの気になる今後

という文字が Yahoo ニュースで踊ったのは、1 月 15 日のこと。学芸館サッカー部で感動して、僅か一週間後にまた岡山県に嬉しいニュースが舞い込んできました。

ニュースでは・・・

岡山の3区（中学生3キロ）を走ったドルーリー朱瑛里（津山鶴山中3年）は、38位でタスキを受け取ると17人をごぼう抜き。従来の区間記録を8秒更新する9分2秒をマーク。カナダ人の父、日本人の母を持つ15歳は、「一人でも多く抜いてチームに勢いをつけたかった」と言った。

と、全国にその偉業を発信した。

岡山に風が吹く！！

立て続けに今年３つ目の快挙が起こりました。

ご存じの通り、新谷仁美選手がヒューストンマラソンで、日本歴代２位の好記録で優勝を飾りました。2014 年に引退後、2018 年６月に現役復帰して、着実に実績を積みながら得た快挙です。

学芸館サッカー部、ドルーリー選手、新谷選手、それぞれに、たくさんの思いに後押しされて得た、偉業なのではないでしょうか。